

## 詩 追憶のカイロ (12)

カイロで過ごした経験のある読者のなかには、とよださんの詩が、ほのぼのとして暖かく、懐かしいカイロの情景を思い出させてくれると、喜んでくださり、次回を待っている方々もいて、とてもうれしく思います。

この詩集は、NHK 記者だったご主人とともにエジプト、カイロで暮らした3年半の間に書きとめた詩をまとめた詩集『こどものピラミッド』(2019年8月出版) から、作者の承諾を得て紹介するものです。

第四次中東戦争が終わったばかりのころは、シナイ半島はイスラエル領であつたのです。シナイ山観光に出かけるためには、アラブの土地からイスラエル領に入るためには驚くような質問攻めにあいました。

さて、「追憶のカイロ」は諸般の事情で掲載ができない号もありましたが、いよいよ『こどものピラミッド』も最後の二編になりました。最後の2回は、余計なご紹介をしないで、とよださんの心の奥に秘められた、深くて優しい祈りを受け止めたいと思います。(塩尻和子)

とよださなえ

### シナイ山へ I

ゆれている  
ラクダの歩くりズムで  
ゆれている  
そう  
私はラクダの背中に乗っていた  
見せ物のラクダでなく  
乗り物としての  
ラクダ

聖書の中の  
牧場（まきば）という言葉に  
柵があつて 一面の緑の場所を  
目に浮かべてはいませんか？  
聖書の訳によって  
牧場でなく『荒野』となっているのが  
あります  
その方が近いのです  
聖書の勉強会での  
先生の言葉が思い出された

荒野の野という言葉と  
目の前の地面を照らしあわせると  
まだまだなまぬるい  
野という字には  
ヒメジオンとかすぎな位は  
生えていそうな語感がある  
荒涼とした岩肌の地表は  
地球の出来かたの標本みたいだ  
上りの道は曲りながらも  
くの字を繰り返す  
モーゼの十戒のシナイ山  
ホレブの山並迄

大分先に行く ラクダの背で  
写真を撮っている人も  
歩いていく人々も「見えた」  
目が見えているなら大丈夫  
と 自分に言い聞かせていた  
なにしろ その時  
生まれてはじめて  
血尿 血便 下痢に見舞われていて  
身体が次にどうなるのか  
見当もつかずにいた  
ユダヤ教徒でもキリスト教徒でもないが  
シナイ山に登るには敬虔さに欠ける  
我が身に  
うんざりもし 哀れとも思った  
生きている印を  
ラクダのゆれに確認した

数時間前まで シナイ山に登る  
グループの人数に入っていることを  
知らなかつた  
夫がヨルダンに行っている間  
K夫人と私の二人  
エイラートで過していると良いヨ  
紅海の続きできれいな所だから  
エルサレム旅行会社からの封筒に  
エイラート行きの飛行機の切符と

ホテルの名前は確認した  
かつてK氏と夫が旅したイスラエルを  
K氏が亡くなつて  
夫が歩いた跡をなぞつてみたい  
という K夫人に付き添つた  
形の私であつた

イスラエルに入国する飛行機に乗るには  
搭乗前に三十分位一人一人  
尋問を受ける  
何の為の入国か  
誰のお金で切符を買ったのか e t c  
一人が話すと、又別な人が出てきて  
似たような質問をする  
そして、先の尋問者と奥で  
矛盾点はないか、疑問点はないかと  
話すらしく、ささいなことでも  
ねじこんでくる  
爆発物など危険物持込み防止策ではあるが  
人を信じないことに  
勝ち誇った喜びを浮べた顔には  
性悪人間製造所とレッテルを貼りたい  
ネタニヤフのせいだけでもないらしい  
イスラエルの建国の歴史か

その尋問が国内便でもあつた  
搭乗人員は飛行機の大きさに比例して  
少なくなつてゐるから  
時間はたっぷりあると踏まれたか  
K夫人と私との関係からはじつた  
第一問は英語にするか仏語にするかだが  
私も頭を切り替えて  
英会話教室の生徒となつた  
腹を立てるよりも  
己の健康の為に  
なにしろ 血尿 血便の私であつた

数年前に  
イスラエルのバスでの国内ツアーリーに行った  
そこで行き会つた

ニューヨークから来たという日本人女性  
ロンドンからの日本人の女子大生  
それぞれの尋問の具合を尋ねた  
『私、もう泣きました』と  
同じ答えが返ってきた  
キリスト教文化の中で学ぶ中  
発祥の場所を見てみようと  
志を持った若者への扱いも  
入国したいのはアンタで  
入国させるかどうかはこちらが決める  
とばかり 居丈高な態度をとる係官  
目には目を 歯には歯を  
という訳にはいかない入国希望者

足を折って背中に私を乗せたラクダは  
一見 うやうやしかったが  
ラクダ使いの言うことを聞いただけ  
彼が手抜きをして手綱を離すと  
上から降りてくる人の群に  
頭を突っ込もうとした  
イタズラッ気があるのか  
気晴らしの行為なのか  
ラクダ使いは、さすがにベドワイン  
機敏にラクダを押さえ付けた  
背中の上の私は全く無力で  
ラクダに対しては何の影響力もない  
カイロのピラミッド周辺の  
ラクダ使いと異なり  
途中余分のお金をせびる様子をみせないのは  
立派  
聖域ということか

モーゼが歩いた時代  
道があったのだろうか  
女と子供を除いて  
男子が約六十万人 そこに  
羊も牛も多数まじっていたという  
旧約聖書の出エジプト記の数字を  
牧師であり、神学の教授が  
あり得ないと言っていた

専門家が  
そんな否定の言葉を使うと  
親しめ 信頼したくなる  
とりあえず 六十万人を  
位置つけようと試みた  
ラクダの上の三メーター近い  
目の高さをもってしても  
どんな風景になるのか  
想像すら出来なかった  
一つわかっていることは  
ユダヤ人にとって  
聖書は一つ うっかり旧約などという  
言葉を使わないこと

身も心も 信頼している訳でもない  
ラクダの背中に預けて  
シナイ山の麓へ近づいていた  
丁度六十歳で 人生を  
一周してきた私だ  
捨てて、捨てて、という境地  
今居る場所が  
私の住み家  
こんな考えも  
モーゼの時代だったら  
異教徒と見なされただろうか